【颯田琴次博士古稀記念論文】

T. KASHIWADO, M.D., Y. SATO, M.D. AND R. KASHIWADO, M.D.: A CASE OF EOSINOPHILIC GRANULOMA OF THE TEMPORAL BONE

側頭骨エオジン嗜好性肉芽腫の 1 例

横浜市立大学医学部耳鼻咽喉科学教室

授 教 柏 戸 貞 一
カシワ ド テイイチ助 手 佐 藤 靖
サ トウ ヤスシ研 究 生 柏 戸 良 二
カシワ ド リョウジ

緒 論

私共は今回、側頭骨に骨破壊強く、然も其の破壊が非常に限局性であつて、其の部の肉芽に強いエオジン嗜好性細胞の浸潤を認めた 1 例を経験した。此の種の病変は本邦文献にあつては其の記載少く、臨床的に珍らしいと考えられるが、同時に此の種の病変に就いては今なお其の原因に就いて多くの議論が為されて居り、此の種の病変を一の独立した疾患と做す可きか否か、多くの問題を残すものである。故に其の経験を報告し、併せて 2,3 の考察を報告し度い。

実 験 症 例

患 者 23 才 男子。

来院時主訴 右耳漏及び眩暈。

家 族 歴 特記することなし。

既 往 歴 昭和 22 年 頸部脊椎カリエス罹患。

現 症 経 過 昭和 26 年 12 月上旬、右耳下部腫脹、当時耳下腺炎の診断の下に切開、以後半年位膿汁が出没して居た。其の後は膿汁が引き続き流出。昭和 28 年 7 月膿汁が止まると共に右耳漏が起きた。昭和 29 年 1 月眩暈が起り、前頭部に頭痛あり。同時に次第に難聴となつた。

現 症 全身的に軽度の右側斜頸がある。体格稍々小にして栄養稍々不良、右下顎部に強度の変形あり。欠損状強し。牙関緊急があつて約一横指以上開口不能。側方凝視にて自発性眼震あり。鼻咽頭に著変なし。左耳は正常であるが、右耳に著変がある。即ち右外耳道に膿汁貯溜多く。後上部に肉芽あり。

狭窄部前壁に瘻孔があつて、之より搏動性の排膿を認める。瘻孔症状著明で、之がため鼓膜像不明である。

耳鼻科的諸検査成績として、耳漏の菌検査を行うに、起炎菌少く、結核菌も陰性、廻転試験を行うに、20 秒 10 回にて、右方廻転 16 秒 24 回、左方廻転 10 秒 13 回の後眼震あり。聴力は右耳高度難聴、但し、骨導は両側共に正常。レ線検査に依るに右側頭骨鱗屑部に極めて鮮明の広大な骨欠損を認める。其のレ線像は第 1 図の如く、其の形状は半月状であり、其の模様は全く特異的である。

第 1 図

全身的諸検査に於ては尿、血液に著変なく、頸部レ線検査を行うに頸椎の一部に著明の変化を認める。

治 療 昭和 29 年 2 月 16 日。病名不明の儘一応側頭骨の開放を行つた。然る処、側頭骨含気蜂窠は次

の事を除いては正常であつた。即ち、側頭骨鱗屑部は顳骨根部に亘つて広汎な骨欠損を示し、其の部は硬脳膜が露出、其の表面は暗赤色の肉芽を以て被われて居た。其の模様は結核性病変とは相違して居る。依つて其の肉芽の一部を切除し創腔の閉鎖手術を行つた。切除肉芽に就いては病理学、吉村教授の組織学的検査を受けた処、エオジン嗜好性肉芽腫と云う事であつた。其の後ペニシリン、スルファミン剤の注射を実施した処外耳道への排膿が増加して来た。3月27日より耳部の放射線照射を依頼各日毎回150r宛、4月30日に総量1650r照射、之により排膿も著減し、眩暈も消失し元気となり、5月3日退院した。

病理組織学的検査成績 昭和29年2月16日手術に当り採取した局部の肉芽組織に就き、病理組織学教室吉村教授の検査を受けるに、次の様であつた。

全体は所々海綿状になつた処の肉芽組織で、結核の如き像はない。肉芽を構成する細胞は、組織学的には比較的血管にとむ肉芽組織様構造がみられる。

(Ⅰ) 主な細胞性構成要素は (a) 網状細胞及び組織球 (b) エオジン嗜好性白血球(之れより少し幼若なエオジン嗜好性骨髓細胞も混在す) (c) プラズマ細胞及び若干の淋巴細胞である。

(Ⅱ) それ等の組織構成をみると、網状細胞及び組織球は、ある所では密に、ある所では粗に存し、原形質連合を成して、大体網状機構を構成する。この様な網状機構の中に、エオジン嗜好性白血球及びプラズマ細胞、若干の淋巴細胞等の細胞要素が、別別に又は一部交り合つて、分散している。

数から云うと、エオジン嗜好性細胞が可なり多い。

(Ⅲ) 以上の事から網状細胞(A)が、この組織の細胞母体を成し。この細胞母体に支えられてエオジン嗜好細胞(B)、及び若干のプラズマ細胞と淋巴球(C)、が存在する訳であるから、(A)のみについて云えば、網状細胞腫(又は網状組織症)であり。(A)と(B)を組合せれば、エオジン嗜好性肉芽腫であり、(A)と(C)を組合せれば、プラズマ細胞性骨髓細胞性網状細胞腫(即ち骨髓細胞腫)と云い得る。故に、(A)(B)(C)全部を組合せれば、プラズマ細胞性エオジン嗜好性骨髓細胞性網状細胞腫である

が、エオジン嗜好性細胞が、特にプラズマ細胞及び若干の淋巴球よりは多いと云うことの故に、骨髓腫の要素を加味した。エオジン嗜好性肉芽腫(即ち、エオジン嗜好性骨髓網状細胞腫)と見做したい。

エオジン嗜好性細胞が豊富に浸潤して居る模様は第2図の如くである。

第2図

総括並に考按

以上私共が経験した症例を総括するに23才の男子で4年前頸椎カリエスを罹患したものが4年後、右耳下腺部より下顎部に亘り慢性炎症性病変を起し、切開排膿等を行つて居つたが、其の中、牙関緊急、下顎骨変形を生じ、次いで罹患側耳漏及び眩暈起り、之が為結核性病変の耳科侵襲を憂いられたが、レ線的に側頭骨に特徴のある骨破壊機転出現、局部の肉芽を病理組織学的に検索した処強度のエオジン嗜好性細胞の浸潤を認めた。

ペニシリン、ストレプトマイシン、スルファミン等はあまり病変に効果を認めなかつたが、レ線照射が大いに有効で之によつて炎症は一応消退したという事である。

此の種の病変の本態は果して何であらうか。此の点に関し本症に類似した症例を本邦文献に就いて調査して見たが、仲々相当するものが見当らなかつた。然るに最近 American Journal of Roentgenology に16才の男子で鼻部及び前額にレ線写真上非常に著明な限局性骨破壊像を示し、病理組織学上

其の部の肉芽に著明のエオジン嗜好性細胞の浸潤強く、以上の症例と大変よく似た症例が Wilson 氏によつて報告せられた。氏は其の報告に当つて骨のエオジン嗜好性肉芽腫例なる病名を与えて居るが、今其の記載を見るに、此の種の疾患に就いては既に Fingi 氏が1929年骨髓腫の1種として記載したが、1938年 Schairer 氏はエオジン嗜好性反応を示す骨髓炎とし、1940年 Otani 及び Ehrlich は1つの良性肉芽腫と発表した。1940年 Lichtenstein 及び Jaffe 氏は骨のエオジン嗜好性肉芽腫と名づけた。以後1953年迄に約200例が報告せられたとの事である。之に対し氏の記載する所を見るに、本症はレ線検査に於て著明の骨破壊像を示し、然も其の破壊像は非常に明確な限局性を示し、局所の肉芽を病理組織学的に検査する時は基質は脂肪沈着多く褐色の色素沈着を認める空胞の多い組織球よりなり、此の間に多数のエオジン嗜好性細胞の浸潤あり、一方多核性巨細胞が骨梁辺縁に沿つて認められる。臨床的には多くは幼若年者に見られ、屢々骨膜を破壊し軟部組織に浸潤し、好発部位は頭蓋骨、肋骨、骨盤、脊椎、長骨であるとして居る。

此の記載は Anderson 氏の病理学書に於ても認められ略々同様の記述が行われて居るが、氏は結局本症の本態に就いて猶多くの研究が残され、殊に Hand-Schüller-Christian 氏病の1型でないかと云う観察が可なり強く行われて居ると云う。依つて更に引き続き2,3の文献を渉猟した所、V. Goodhill 氏は18例の頭蓋骨肉芽腫症例に就き詳細な臨床的検査を重ねた結果、エオジン嗜好性肉芽腫と記載せられたものは、従来 Letterer-Siwe 氏疾患又は Hand-Schüller-Christian 氏疾患と呼ばれた疾患群と同一系列に立つ可きものであつて、従つて之等を一括して組織性肉芽腫と名づく可きであると主張するに至つて居る。此の点 J. Chisolm 氏も2例の Hand-Schüller-Christian 氏病を記載するに当り Goodhill 氏と同様の意見を表明して居る。

以上の観点から私共が経験した症例が果して Hand-Schüller-Christian 氏病又は Letterer-Siwe 氏病の一異型に属せしめられる可きか否かに就いては簡単に決定し得ないが、Hand-Schüller-Christian 氏病は其の本態が主として脳下垂体の失調にあり、

之が為め多くは著明の尿崩症、眼球突出症、その他の脳下垂体症状を伴うとされ、Letterer-Siwe 氏病が主として亜白血病性細網内被症として肝、脾肥大症を伴うと称せられるに對し、私共の症例は少くも臨床的にそれ等の症状が証明せられなかつた点よりは、猶特異の独立疾患としての性格を所有したものではないかと考えられる。之に対し本邦文献に於ける私共の症例と同様な記載を調査するに、耳鼻咽喉科領域に於ては其の記載は比較的少い。依つて更に之を単に側頭骨に限局することなく広く各科領域に亘つて蒐集した所、次表に記する様な報告を集める事が出来た。

第1表

病 例 番 号	報 告 者 氏 名	患 者 年 令	性 別	罹 患 部 位	病 変	血 液 変 化	治 療	経 過	備 考
1	溝口周作	19	男	全身皮膚	表在性皮膚病 （紅腫）	Eosino- philie	レ線照射 スルファミン	治	
2	高木忠信 浦川一朗	5	男	反脛骨 上 端	レ線照射 骨破壊著明		レ線照射	全治	
3	中馬英二	33	女	胃	潰瘍部に				
4	木村哲二 島村俊一 安藤輝夫	26	男	全身皮膚 諸所及び 口内粘膜	表在性 潰瘍 （紅腫 乾裂）	Eosino- philie			5年前 より 高度の 原病在
5	石山俊文 白土進	27	男	頭部及び 四肢皮膚	3に同じ		無治療		
6	磯 要	56	女	舌		10% Eosino- philie	手術及び レ線照射	治	
7	山口	28	男	右頰部	軟部組織 腫 瘍	Eosino- philie	手 術		

今以上の表によつて按ずるに本邦に於けるエオジン嗜好性肉芽腫の記載は骨病変として記載せられるよりも寧ろ軟部組織に認められる場合の方が多様なに感ぜられる。

従つて、我々の症例の様に側頭骨に強い骨破壊を伴つて其の部の肉芽に強いエオジン嗜好性細胞の浸潤を見た例は甚だ少い様である。猶本症の治療に關しては一部の諸家はレ線照射が非常に有効であると云う事を記述して居る。私共の症例が各種抗生薬療法乃至外科療法に對し、殆ど反応を示さないが、レ

線照射により症状たちまち軽快したことは、上記諸家の説と一致する。

結 論

私共は側頭骨の骨破壊機転強く、局所の肉芽にエオジン嗜好性細胞の浸潤の強い1例を経験し、文献的考察を加えた結果、其の本体に就いては明確な結論は与え得ないが、何れにしても一の特異な疾患と考えられる1例を報告した。

文 献

- 1) *Anderson: Eosinophilic Granuloma of bone, Pathology*, 1948.
- 2) *Goodhill: Laryngoscope*, No. 1, Jan. 1950.
- 3) *Marshak et Harefuah: Arch. of Otolaryngology*, Vol. 57, No. 5, p.587.
- 4) *R.G. Wilson: The American Journal of Roentgenology, Radium Therapy and Nuclear Medicine*, p.936, June, 1953.
- 5) *J. Julian, Chisolm: Laryngoscope*, No. 6, June, 1954.
- 6) 溝口周作: *皮膚泌尿誌*, 49巻, 6号, 昭和16年6月.
- 7) 木村哲二, 島野毅八郎, 安藤輝夫: 異常なる eosinophilic 性肉芽腫, *日病理会誌*, 39

- 巻, 59号, 昭和26年3月.
- 8) 中馬英二: *Eosino 嗜好性細胞浸潤を伴う, 骨肉芽腫症の1例, Medical Journal of Osaka University* 2巻, 2号, 71頁.
- 9) 磯要: 舌に発生したエオジン嗜好性肉芽腫の一症例, *日医大誌*, 第21巻, 第1号, 102頁, 1954.
- 10) 高木忠信, 浦川士朗: *Eosino 嗜好性細胞骨肉芽腫*, *日外会誌*, 50巻, 8~9号, 350頁.
- 11) 田中弘一: シュラー クリスチアン氏病患者に観たる耳科的所見, *大日耳鼻*, 第41巻, 昭和10年.
- 12) 石山俊次, 白土進: エオジン嗜好性淋巴腫, *逋信医学*, 4巻, 2号, 93頁, 昭和27年7月.
- 13) 山口: 高度のエオジン嗜好細胞浸潤を呈せる特異なる良性腫瘍? 症例, *耳喉*, 15巻, 第5号, 67頁, 1942年.

本報告は日耳鼻東京地方会第26回大会に発表した。病理組織学的検査を賜った本学病理吉村教授に深謝します。

(原稿到着=昭和31.7.31日)